

生徒の学力向上を目指す本校の取組

1 本校の現状と昨年度までの取組

(1) 家庭学習の状況

埼玉県小・中学校学習状況調査での本校生徒の家庭学習の時間は、県・市内に比べ、勉強時間の長い生徒が多い。(図1)

これは、平成22年より学校独自で作成し使用している自主学習ノートと一体化させた『生活記録ノート』を学級担任が中心となり、きめ細かい指導を粘り強く続けた結果であると考えられる。

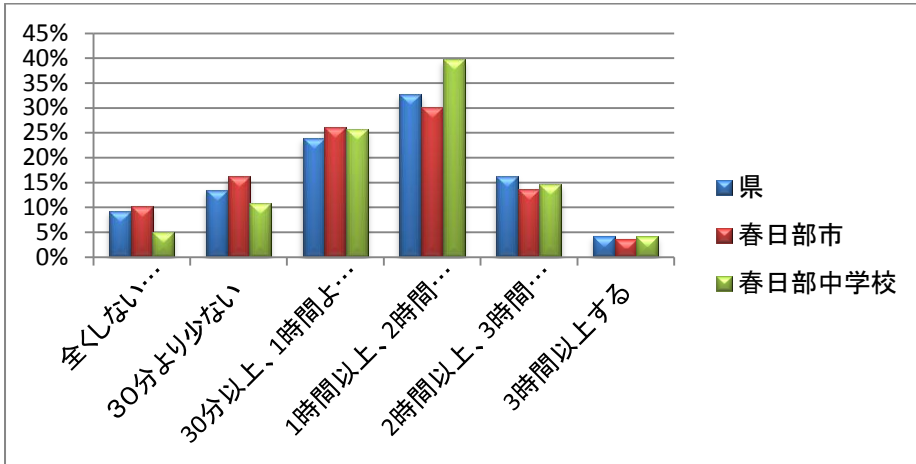


図1 学校の授業時間以外に、1日にどのくらい勉強しますか [平成25年 埼玉県小・中学校学習状況調査]

(2) これまでの課題

しかし、生活記録ノートの使用方法については、教師間での共通理解が十分に図られておらず、教員一人一人の視点での指導と評価を行って来ている。そのため、学年・学級によって取り組みにばらつきがあり、家庭学習の習慣化に学級・学年によって差が生じ、全校的という視点では効果的な結果に結びついていなかった。

そこで昨年度は、校内研修を通じて、評価の仕方、実践している学習指導の工夫について話し合い、家庭学習の習慣化に関わる問題点やよりよい生活記録ノートの活用方法について話し合い、以下のように生活記録ノートの在り方をまとめることができた。

- ①家庭学習の習慣化を図ることを主目的とする。
- ②「誰でも、無理なく、継続して」行えることを基本とする。
- ③個に応じた指導を念頭に指導と評価をする。
- ④内容についての制限はなく、どの教科を学習してもよい。
- ⑤学習したプリントを貼り付けてもよい。
- ⑥塾等での学習とは切り離して考え、家庭学習の習慣化へと立ち帰る。

以上の方針を教員間で確認し、生活記録ノートの活用を全校で始めた。

2 本年度の取組

家庭学習の習慣化を図ることを主目的としていることには、これまでと変わりはないが、家庭学習の質の向上や個に応じた段階的な指導などを新たな視点として取り入れ、取り組んでいる。特に質の向上を目指し、生徒の詳細な実態調査を行い、分析と考察を繰り返し、「学力向上に繋がる生徒像」を見いだすことを試みた。

(1) アンケート調査

①目的 生徒の生活実態と学習意識に関するアンケートを基に、学力の向上が見られる生徒と見られない生徒の相違点を探り、より効果的な学習指

導法を見だし、家庭学習の定着に繋げる。また、その結果を生徒や保護者に開示することで、学校と家庭の連携と家庭の教育力を向上させる。

②アンケートの内容 40問から構成され、生活規律、生活意識、生活態度、学習意識、学習環境の5つの内容から構成される。全校生徒をアンケートの対象としている。

設問例

- ・ゲームや携帯電話、パソコンを使ってよい時間を決めていますか？(生活規律)
- ・頑張れば、いつか実現すると思いますか？(生活意識)
- ・多少いやなことがあっても我慢するようにしていますか？(生活態度)
- ・点数や成績が伸びることがおもしろいですか？(学習意識)
- ・帰宅した時に家に人はいますか？(学習環境)

(2) アンケート結果

①中学生になって苦手になった教科とそのきっかけ

2・3年生の結果では、数学と英語に苦手意識を持つ生徒が多いことがわかった。(図2) 英語では全体の約4割、数学では女子の約3割が苦手意識を感じていることがわかった。

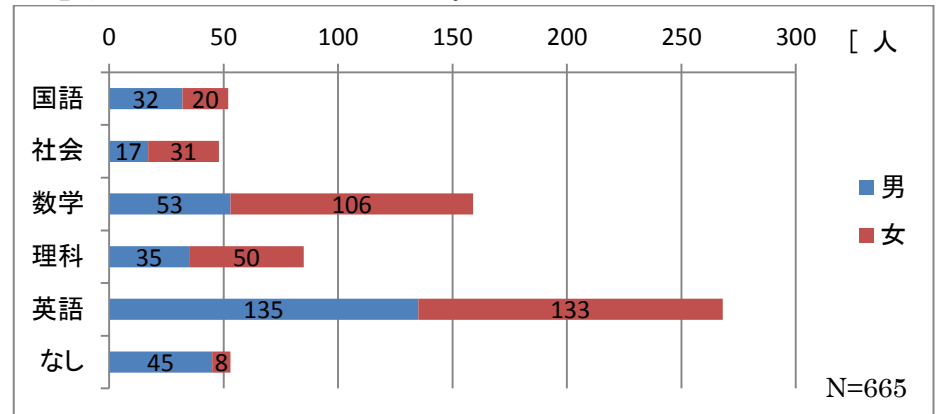


図2 中学に入って「特に苦手」と感じるようになった教科はありますか

苦手と感じるようになったきっかけにはいくつかの理由があるが、「先生の言っていることがわからなくなった」生徒が約32%いることから、授業における指導法の工夫や改善が求められる。

②苦手になった教科を克服できた生徒とできなかった生徒の相違点

この苦手を克服できたと回答した生徒は、全体の12%いた。その生徒の特徴は、学習への取り組み方に表れた。克服できた生徒の1日あたりの「自主的な勉強の時間」が平均52分であるのに対して、克服できなかった生徒は平均38分であった。(図3)

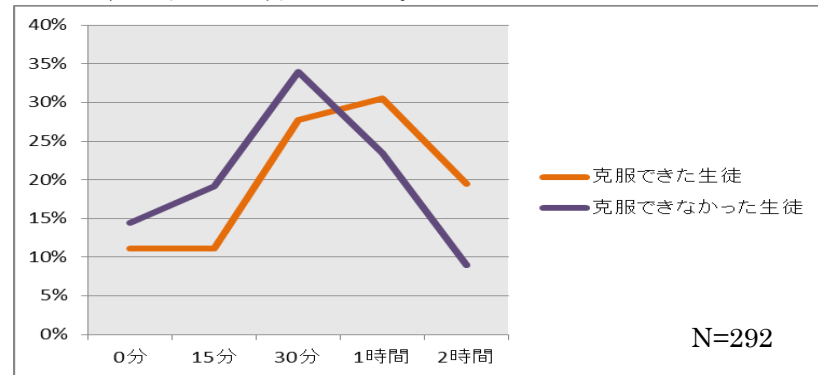


図3 自主的な勉強の時間

また、1日あたりの「家庭学習の時間」では平均時間に差はないが、“2時間以上”の学習をする生徒の割合が16ポイントの差をつけて克服できた生徒に多かった。(図4)

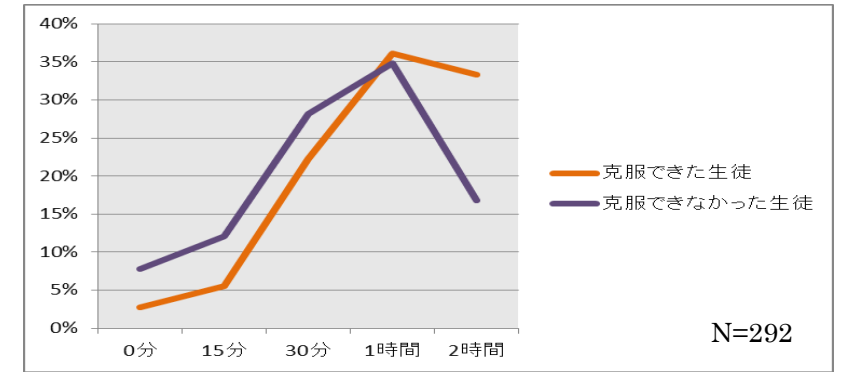


図4 家庭学習の時間

(3) アンケート結果の生徒への還元

これらの結果を生徒の学習活動へ活かすために、全校で『生活記録ノートの活用方法について考える』学級活動を実施し、データを基にした学習の現状とその克服へ向けた取組を生徒一人一人が考える時間を設けた。また、「生活記録ノートの活用術」を記したリーフレットを発達段階に応じて学年毎に作成し配布した。それらの取組の結果、担任が学習の質について6段階で評価する調査において、平均6%の増加が見られた。(図5)

(4) アンケート結果の保護者への提示

また今後は、保護者に対しても生徒と同様に、規律や意識、態度と学力との関連性を具体的に示し、生徒・保護者・学校が類同な思いを共有できるようにし教育効果を高める。(図6)

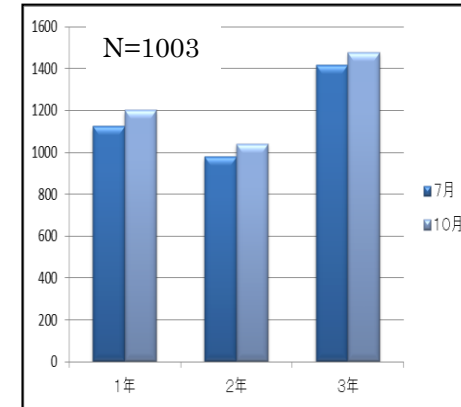


図5 学級担任による学習の質の評価 (合計値)

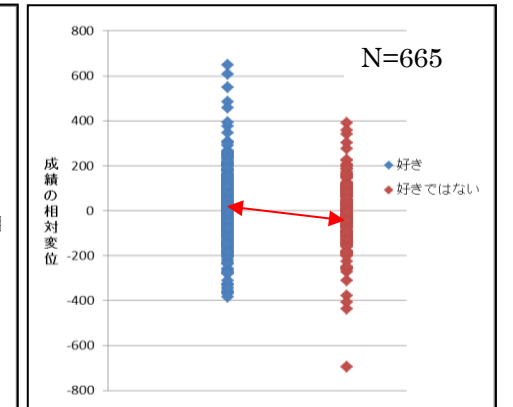


図6 がんばることが好きですか (1年後の成績の相対変位)

3 まとめ

本校独自の『生活記録ノート』の取組は、生徒の学力を向上させる手段として有効である。なぜなら、苦手を克服できた生徒はこのノートを活用し自ら課題を見だし、目的を持って学習に取り組んでいるからである。また、それらを手本として全校的に指導することによって、学習の質の向上が見られることから、今後も「生徒が自ら学ぶ力をつける」支援を続け、生徒の実態を適切に捉え「教師の授業力を磨く」ことで、生徒の学力向上へ繋げていきたい。(図7)

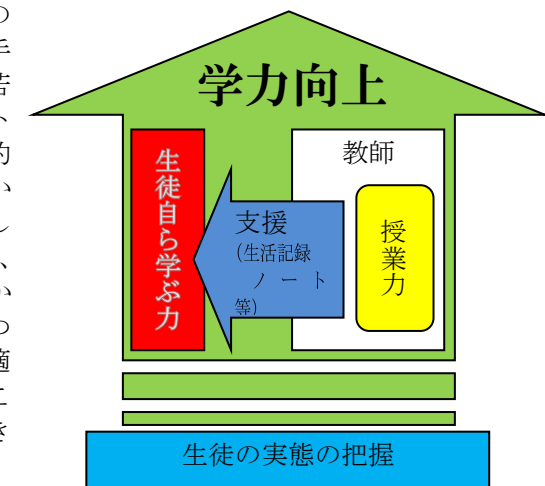


図7 学力向上へ向けた本校の取組